

本年度の金沢みらい茶会では、現代美術作家のさわひらきが映像ワークショップと共に制作した、4チャンネルの映像インスタレーションを展示します。

茶の湯における「時間と寸法」に着目し、その存在の確かさをめぐる諸問題がテーマです。そして、茶人と茶器、茶器と茶器、主人と客人、茶人と時間、茶器と空間、それら「それぞれのいい寸法」とはどのように計られるのか、という問いが出発点になりました。

研究者や茶人らと向き合う中で、さわは「眼鏡を外す」ことで表面的な部分に目を奪われなくなり、自分自身の身体をもって茶の湯を感じるようになったといいます。

俗世から茶室空間に身を移し、制約のある空間で限られた道具を用いた一連の行為。主人は客人をもてなした後に場を清め、そこで何が執り行われたのかどうかを曖昧にしながら俗世へと戻る行為。それらの行為はしなやかに連続し、絡み合い、そして、個人的でありながら茶室で共有された所作は、強度ある必然性を伴うものではないか、という仮説が立てられました。

鍛錬を重ねた茶人の点前を目にすると、一連の茶事における道具の位置に宿る身体性に驚かされます。そして、道具はある一点を指し示す座標として置かれるのではなく、相対的な「それぞれのいい寸法」が反映された地点に置かれていることに気づかされます。茶道における一連の行為は、俗世の時間と空間から解放された状態で行われる極めて個人的なできごとであり、茶室はそれを共有しあう場なのかもしれません。

茶は宇宙である

そんな言い古された言葉が、なぜか非常に鮮やかに頭に浮かびあがる瞬間。

茶人の頭の中の宇宙が、茶人の身体をもって表現され、それが客人と共有される仕組みとしての茶道。ここでは、時間と寸法の両者は相対的に扱われ、人、茶室/建築、炭、水、そして、花に宿る時間がそれぞれ等しい価値を持ち、それらの結節点としての道＝茶道が成立するのではないか？そして、「茶道とは宇宙の夢である」という見立てを試みました。

Time and Scale

by さわひらき / 映像ワークショップ

coordinated by 上田陽子

日程 11/26金 ~ 11/28日

時間 10時~20時 入場無料

会場 里見町APARTMENT303 (金沢市里見町42-9)

出演：大野長一郎 (大野製炭工場)、花安藤、廣田吉崇 (茶の湯研究者)

会場協力：成巽閣、金沢R不動産/E.N.N.

協力：株式会社谷庄、株式会社POLARIS、近岡宗啓、shirasagi/白鷺美術

「金沢みらい茶会」として、リアル茶会が開催できない中、お点前や茶事の紹介映像に収まらない映像表現を試みたい。そこから本作品はスタートしました。

4チャンネルの映像では、炉の薄茶平点前を行う茶道の流派や点前等の研究者 廣田吉崇氏、茶炭となるクヌギの植林から行う大野製炭工場の大野長一郎氏、山に咲く野趣溢れる季の花を扱う花安藤の安藤氏、そして加賀藩13代藩主前田斉泰が母のため建てた成巽閣の茶室「清香軒」を映し出しています。

茶室の中で、2時間弱で燃え尽きる茶炭と、1日で枯れてしまう種もある花は、茶室の中で有限性を感じさせる生きた存在です。数寄者の茶室ではなく成巽閣の利他の茶室。流派を俯瞰的に捉え自らの茶道を実践する廣田吉崇氏。茶の湯における「時間と寸法」を捉えようと、4者を切り取りました。

さわひらき

1977年石川県生まれ。2003年ロンドン大学スレード校美術学部彫刻科修士課程修了。ロンドン在住。映像・立体・平面作品などを組み合わせ、それらにより構成された空間/時間インスタレーションを展開し、独自の世界観を表現している。自らの記憶と他者の記憶の領域を行き来する反復運動の中から、特定のモチーフに光を当て、そこにある種の普遍性をはらむ儂さや懐かしさが立ち上がってくる作品群を展開している。

映像ワークショップ

木村悟之 (アーティスト、映像制作) と明貫絃子 (キュレーター、メディアアート研究) が2018年に結成。既存の映像鑑賞体験やプラットフォームをハッキングするマインドで、映像の新しい使い方と楽しみ方を提案している。

<https://www.eizo.ws>